[対談]

白井晃×谷賢一

KAAT神奈川芸術劇場
芸術監督

DULL-COLORED-POP
主宰

DIALOGUE [I O]

人類史では言語コミュニケーションが現れた瞬間、
「表現」は大きく前進する。
その衝撃をお客様に追体験してもらいたい。

取材・文:尾上そら　撮影:平岩享

あらゆる創造的活動を中断させ、いまだ世界中で猛威を振るう感染症により、
KAAT神奈川芸術劇場も5カ月近く主催公演の延期・中止が相次ぎました。
けれど、それはただ活動を停止していたわけではなく、劇場での創作にかかわる人々と話し合い、
万全の予防対策を講じて再開に臨むための準備期間だったのです。
劇場が10周年を迎える今秋、満を持しての再始動は芸術監督・白井晃が演出する
音楽劇『銀河鉄道の夜2020』と、続く谷賢一 作・演出の『人類史』から。
ウイルスの脅威に縮こまった心を解放する、豊かな演劇的創作に取り組む二人にめざすところを訊きました。

―白井さんがアーティスティック・スーパーバイザーに就任した2014年以来、KAATでの創作で谷さんとは何度も組んで来ました。演劇やライヴが次々中止となった4月半ばには、谷さん率いるDULL-COLORED-POPの企画で、オンライン対談も行ったそうですね。

白井　忘れもしない4月18日、谷さんと相対して話すのはあの日以来です。対談では「こうなったら積極的に落ち込もう!」という話をしましたね(笑)。

谷　はい、僕は家でプラモデル作りに没頭していた時期で(笑)、二人の混迷ぶりが広くさらされる対談でした。

白井　以降も厳しい時間は続き、劇場の主催公演は8月いっぱい動かすことができなかった。でも活動が完全に止まったわけではなく、秋以降の演目に携わるクリエイターの方々に連絡を取って話し合い、過去作品の配信や広報活動など、KAATから発信することには意識的に取り組んできたつもりです。今日の対談は、改めて劇場にお客様を迎えるための第一歩。危険があれば都度足を止め、万難を排して粛々と創作を進めることで、観客と表現者の間の信頼を取り戻さねばと思っています。何せ秋からのラインナップは開館10周年の記念シリーズ。KAAT開館の年には東日本大震災もあり、巡り合わせとしては厳しいものも感じますが、谷さんは僕がKAATにかかわり始めた時から作品づくりに参加してくださっているので、このシリーズにも力を貸して欲しかったんです。

谷　ホールでの創作は18年の『三文オペラ』に続き二度目ですが、本当に得難い機会をいただきました。前回は大先達ブレヒトの作品に挑ませてもらい、今回はイスラエルの歴史学者ユヴァル・ノア・ハラリ氏の著作「サピエンス全史」に想を得ていますが、内容的にはオリジナル作品。気負うところも多く、初回以上にしっかり取り組まねばと思いますし、結果、大成功を呼び込むくらいの練り上げ方をしなければと日々思考を巡らせています。

白井　次代を担う若いつくり手たちが経験を積む場所として、KAATを使って欲しいのは就任当初からの私の希望です。今回も存分に劇場を使って下さい。でも「サピエンス全史」が題材と聞いた時には驚きました。プロットを読んだ今でもどうやって創るのか、どんな作品になるのか予想がつかないし予断を許さない(笑)。あの大書から何を谷さんが抽出し、演劇作品として可能性を広げてくれるのかひたすら楽しみです。

人類が表現を獲得していく過程は必ず面白いドラマになる

―長くあたためていた企画なのですか?

谷　思いついたのは2年ほど前で、周囲に話すと大抵「どういうつもり?」という反応でしたが(笑)、僕の中では構造や展開のイメージは着想の段階からありました。一般的な作品は主人公が冒頭から旅をし、最終的に別の場所にたどり着くという構造ですが、これを人類全体に置き換え、よちよち歩きの人類が二本足で立ち、ついには地球を制し宇宙の真理にまで至るという物語に捉え直せば十分演劇になる。素材には事欠かない示唆の多い著作ですから、扱うものの取捨選択を誤らねばいかようにも作れると思っています。

―谷さんの創作ノートを一部拝見しましたが、人類の進化の過程が言葉や音楽、美術、ダンスといったさまざまな表現の発見・発展に重ねられるアイデアが興味深いものでした。

谷　人類の歴史は自己表現や他者とコミュニケーションを取る方法、ひいては芸術の技を発展させる過程でもある。言葉を獲得するだけでも場面としては盛り上がるであろう場面の一つになりますが、それまでなかったヴァーバル(言語)・コミュニケーションが突然現れた瞬間に、表現は大きく前進する。その瞬間の衝撃を、作品を介してお客様に追体験してもらいたいんです。

谷賢一(たに・けんいち)

1982年福島県生まれ、千葉県育ち。作家・演出家・翻訳家。DULL-COLORED POP主宰。明治大学演劇学専攻、ならびに英国にて演劇学を学んだ後、2005年劇団DULL-COLORED POPを旗揚げ。ポップでロックな創作スタイルで脚本・演出ともに高い評価を受ける。2019年、福島県と原発の歴史を3部構成で描いた『福島三部作』を一挙上演し、10,000人を動員。この作品で、第64回岸田國士戯曲賞、第23回鶴屋南北戯曲賞を受賞。また、2020年、作・演出・出演の完全一人芝居『アンチフィクション』を上演。一方で劇団外の活動も活発に行っており、『エブリ・ブリリアント・シング』(2020/翻訳・演出)、『三文オペラ』(2018上演台本・演出)などや海外演出家とのコラボレーション作品も脚本や演出補として数多く手がけている。

谷賢一

白井晃

―聞けば聞くほど作品のスケールが増していきます。

谷　ホールサイズの作品は、僕一人では創りようがないと『三文オペラ』の時に痛感したんです。作品にかかわってくれるプランナーの方々、各分野のプロのスキルを十分に引き出すことができれば、どんなスケールの作品、先の「表現が発展する過程」なども描けると思う。『三文オペラ』には初ホールへの構えや前傾過ぎる姿勢があって、そこにも良さはあったはずですが、もっと他者の意見に耳を傾け、委ねるところがあっても良かったという反省もあるんです。その反省を生かすところから『人類史』を始めたいな、と。

白井　僕は『三文オペラ』に出演もさせてもらいましたが、谷さんは一貫して自分のやりたいことを明確に示し、座組を引っ張り続けていたと思います。佳境の時には劇場近くに泊まり込み、24時間＋α作品のことを必死に考え続けていて、血の気の引いた顔は、実にイイ演出家ぶりでした（笑）。

四半世紀を経て再び挑む宮沢賢治の名作に思うこと

―1995年に青山劇場で初演された音楽劇『銀河鉄道の夜』は、白井さんのホールデビュー作。“若手演出家と大ホール”という共通項もあるのですね。

白井　当時は38歳で、1200席の劇場で自分が演出するなんて思いもよらない時でした。「経験しなければわからないことがある」と身をもって知った作品ですし、青山劇場開館10周年の記念作でもあった。その青山劇場がなき今、プロダクションごと新たな場所で復活させたいという想いが企画の始めにありました。

―宮沢賢治の作品の中でも最も知られた、しかも未完成の今作の死生観や幸福論を深く洞察する内容は、時代ごとに読み方を更新しています。今回の創作で白井さんが核とするのは、どのようなことでしょうか。

白井　25年前の創作と全くの別物をという発想には無理がありますよね。バブルの残り香があった初演に比べ、いまだ治療法の確立しない感染症の拡大に悩まされ、社会や経済も逼迫する状況下で向き合う今作の物語と登場人物たちには、初演再演時よりも、時世に翻弄される人の切実な想いや明確な意志が見えて来る気がする。そんなこまやかな違いを丁寧にすくい取り、舞台に立ち上げるだけでも、見えて来る風景はだいぶ変わるような気がしています。

―プランナーは初演から参加している方が多く、俳優陣はほぼ刷新というカンパニー内のバランスが、どんな化学反応を生むのかにも期待が募ります。

白井　外枠の世界に近い箱は創るけれど、中で動く俳優陣は変わり、動かす方法を考える私も25年分年齢を重ねている。そこから生じる自然な変化を見逃さず、形にすることが始まりかもしれません。

谷　25年前……僕は中学生でバレーボール部所属。日常にまだ演劇の「え」の字もない頃ですよ、いやぁまだまだだなぁ（笑）。

―書かれた時代どころかジャンルも違う二作ですが、「人間の幸福」について作中で考えているという共通項があります。現時点でそこをどう考え、描こうとしていらっしゃるか伺えますか？

谷　「幸せとは何か」などという大きな問いに答えられる見識は今の僕にありませんが、今のところ、爆発的な科学の進化を体験した人類が21世紀に入ってなお新しいテクノロジーを手にし、歩みは止まらず未来に進むという終幕を考えているんです。科学の進化＝幸福という図式に個人的には疑問を呈しますが、「人間はどんな状況でも前進していく」という本質は描きたい。それはこの、感染症禍にあってもあらゆる分野の方々が闘い続ける状況にまさに重なるもので、舞台芸術の世界からその闘いに連なる創作になればいいですね。

白井　質問に対する答えと少しずれるかも知れませんが、僕、この数か月でかなり痩せてしまいまして（苦笑）。それは自分にとって幸いを得るもの＝創作を取り上げられたからだと思うんです。“新しい生活様式”には物理的な安全と引き換えに心を縮ませ、感情の躍動を奪う側面もある。そんな、奪われた人間らしさを取り戻す手伝いが舞台芸術の役割であり、人の「幸福」に寄与できる部分ではないでしょうか。

谷　この状況下だからこそ、劇場に来ることのハレの部分や演劇の祝祭性を、お客様に強く感じていただけるはず。まして『人類史』は、人類の歴史を振り返る儀式めいた時間を劇場に満たす作品ですから、そのゴールには大きな解放感があると思う。結果、ご自身が今ある世界や演劇の素晴らしさについても想い巡らせていただけたら嬉しいです。

人類10万年の歴史を2時間で駆け抜ける！

我々人類が、他の人類種を根絶やしにし、力の強い他の生物を押しのけて、この地球の頂点に君臨できたのはなぜか？ その謎をホモ・サピエンスだけが持つ「虚構を信じる」という特殊な能力から読み解いたユニークな学説に注目し、言葉、身体表現、音楽が混然一体となった演劇ならではのアプローチで人類史を読み解き、スケールの大きい舞台作品の実現を目指します。

主催　9月12日（土）KAme先行
9月19日（土）一般発売

KAAT神奈川芸術劇場プロデュース

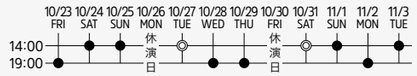
『人類史』

10月23日（金）～11月3日（火・祝）｜ホール｜

【STAFF】 作・演出：谷賢一
音楽：志磨遼平（ドレスコーズ）　振付：エラ・ホチルド

【CAST】 東出昌大　昆夏美 ／ 山路和弘
秋葉陽司　浅沼圭　生島翔　植田崇幸
大久保眞希　奥村佳恵　栗朱音　小山萌子
谷本充弘　内藤治水　中林舞　名児耶ゆり
奈良坂潤紀　仁田晶凱　福原冠　村岡哲至

【チケット料金（税込）】 全席指定　S席￥7,500　A席￥5,000
U24チケット（24歳以下）￥3,750　高校生以下割引￥1,000
シルバー割引（満65歳以上）￥7,000



◎＝託児あり（有料）、公演1週間前までにマザーズ（Tel.0120-788-222）へ要事前予約。